

会費振込先 みずほ銀行川崎支店東北大学ワンダ-フォーゲルOB会 普通口座(370-1881604)

ホームページ <http://go.to/tuwv> または

http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスをお持ちの方は利根川さんに連絡して下さい : GWT00287@biglobe.ne.jp

ヒマラヤ、ランタン谷紀行

3期(昭和39年卒) 後藤龍男

10月に秋のランタン谷を歩いてきました。ヒマラヤはこれで5年目ですが、歳を考えるとこれが最後かと言う思いです。メンバーは3期、松木、佐藤、後藤、4期、及川、5期、藤田の5人です。

ランタン谷はカトマンズから最も近いヒマラヤです。最高峰ランタン・リルンが7,246 mで、8,000 m峰は一つもありません。イギリス人が「世界一美しい谷」と形容したことで有名です。カトマンズから山道を車に揺られて約8時間、谷奥の村、シャブルベンシから歩いて往復するのが通常のルートですが、今は現地旅行社が手配したヘリで一気に標高3,000 mのゴラタペラまで上がってしまします。そこから標高3,500 mのランタン村、3,800 mのキャンジン・ゴンパ、さらに奥のジャタンまで足を進めます。世界一と言われるだけあって、実に美しい谷です。谷の両岸に連なる山々もヒマラヤにしてはそれほど高くはないので、ヨーロッパアルプスを少し高くしたような優しい山岳風景です。しかし何と言ってもヒマラヤ、山の高さや峻険さは比べものになりません。

この谷の山はランタン・リルンを除いてすべて5,000~6,000 m級ですから、日本の冬山の経験がある人がきちんと高所順応をすれば誰でも容易に登れます。キャンジン・ゴンパのロッジで一緒だった3人の若いドイツ人のパーティは、翌日ロッジの前に聳えているナヤカンガ(5,846 m)に登頂していました。うち一人は妙齢のお嬢さんでした。5,000 mあたりにアタックテントを張ってそこから1日で往復するのだそうです。もちろんシェルパのサポート無しには登れませんが、少人数で手軽にヒマラヤのピーク登頂を楽しめるのが魅力です。我々にはもう無理ですが、一度OB会の若手メンバーでトライされたら如何でしょう。是非お奨めします。

去年、一昨年チベットやカラパタールでは5,000mを越える場所に何日も滞在しましたが、高山病症状は出ませんでした。今回はほとんど4,000 m以下のところしか歩かないので、高山病特効薬のダイアモックスは服用しませんでした。しかし、一気に3,000 m以上まで上がったためか、例年になく高山症状がきつくて



ランタン谷の奥、ジャタン付近にて



ナヤカンガ峰 (5,846 m)

往生しました。キャンジン・ゴンパから標高 4,700 m のタルチョピークを往復した日の夜は、呼吸が苦しく朝まで寝付けませんでした。他のメンバーも多かれ少なかれ下痢や食欲不振などに悩まされていました。

性懲りもなく、ヒマラヤへ

3期(昭和39年卒) 佐藤 敦

2004年、3回目のヒマラヤトレッキングは、エヴェレストの展望台カラパタール(5,545m)を目指したが、5,200mで重度な高山病になり、肺水腫に近い状態になり、酸素を吸いながらペリチェまで下り、そこでカトマンズからヘリを呼び下山、ネパール人の医者にかかり、皆が帰還するのを一人ホテルで待っていた・・・屈辱の初体験だった。

「もうヒマラヤには来ない」と当時カトマンズで思っていたが、2005年、性懲りもなくまたヒマラヤへ・・・喉元過ぎれば熱さを忘れる・・・の例えどおり、苦しかったカラパタールを忘れてしまったようだ。エヴェレストは南からの写真が有名だが、エヴェレスト北壁を見たいと思い、今回はチベットからベースキャンプを目指した。ワンゲルの仲間、同期生3名、1年後輩1名、2年後輩1名の総勢5名。

日程は10/14 から 28日までの乾期。この時期は寒い展望が良いのが選んだ理由。成田から上海経由成都へ、そこから高度順応と観光を兼ねて九寨溝へ、この空港は2004年9月に開港したばかり。成都から40分のフライト、空港は高度3,400 m、1日滞在、観光。

九寨溝から成都に戻り1日滞在し、ここからラサへ入る、成都から2時間のフライト、ラサの高度は3,600m、高度順応と観光を兼ねて、ポタラ宮、ラサ市内見物に2日間費やす。

<ラサからベースキャンプまでのルート>

ラサ(3,607m)→シガツェ(3,900m)→シガール(4,300m)、ここでも高度順応の為、トン・ラ峠(5,188 m)を往復する、→パン・ラ峠(5,210m)→ロンブク僧院(5,030m)→チョモランマ・ベースキャンプ(5,200m)→ロンブク僧院→シガール→シガツェ→ギャンツェ→カンパラ峠→ラサ
エヴェレスト北壁は壮観であった、ここまでに至るルートは殺伐としたチベット平原で草木もまばらな砂漠地帯と言っても良い風景だが、ベースキャンプからの夕焼けの北壁には大感激。

出発前の身体検査・・・4,000mを越える場所に行く時に旅行会社から義務付けられている検査で総コレステロール値が247で、医者から注意を受けていたが、帰国後の検査ではなんと134と半減していた、トレッキング中アルコール類は一切取らず、食事も粗末なチベット料理、高度4,000mでの滞在、これらの影響と思われる。中でも禁酒が一番の影響か？ これ以降、最低でも週に1回の禁酒を実行、時には2回も。しかし半年も過ぎたら、また元の値の戻ってしまった。尿酸値は行く前が5.2、帰国後は8.6と大幅上昇、これは高山病予防薬ダイアモックスの副作用だろう。この薬の副作用で指先がしびれることは体験していたが、尿酸値もアップすることが判明。

2006年、体力的に言って最後かもしれないが、探検家ティルマンが「世界でもっとも美しい谷の一つ」と紹介した、ランタン・リルンを計画した。その内容は・・・2006年「性懲りもなくヒマラヤへ その2」へ続く。



チョモランマBC

ワングル卒業40周年同期会

5期（昭和41年卒）藤田凱己

我われ同期も卒業以来既に40年が経過し同期会をやろうとの事で9月30日、10月1日と秋保温泉の岩沼屋にて開催した。今回は鈴木先生ご夫妻を招待し（結果的には会費を戴いてしまった）盛大に行った。同期参加者24名、奥様同伴（櫻さん、横山さん）、鈴木先生ご夫妻の合計28名であった。不参加者は今井、伊藤、門屋、瀬尾さんの4名で出席率が非常に高かったのは幹事として大変嬉しかった。

遠方よりの参加者は谷、三宅さん（当日大阪より飛行機で）、遠藤さんは大阪ですが実家の福島より参加、また秋田より築地、舘岡さん、また宮城県議の植木さん（現姓青野）が多忙の所宴会の最中に丁度間に合い参加。

三宅さんの提案で昔懐かしい二口を歩きたいとの事で当日に仙台駅で朝倉、遠藤、谷、三宅と待ち合わせし、また秋保大滝で仙台在住の大塚さんと合流し二口経由山寺への道路の車止めまで車で行き、懐かしい伝蔵荘（現在名は翠雲荘）まで散歩。

峠まで歩こうとの意見も有ったがここで引き返したのが間違いであった。櫻夫妻が山寺より二口峠を越へ秋保温泉へ向かっていたが彼らのほうが遅く、我われが岩沼屋へ着いたら携帯に電話が来たので迎えに行き乗せようとしたが、彼らはやっと携帯が繋がりタクシーを呼んでしまい、小生はそのタクシーの後から岩沼屋へ、櫻さんはタクシー代を損してしまった。

宿で飲むと高いとの朝倉さんの提案で、近くでしっかり酒を購入し、check in後即部屋で宴会開始。不参加の瀬尾さんより十分なる酒の差し入れを戴き感謝しております。本番の宴会ではあまり酒を頼まずにすみ幹事としては胸をなげ下ろした。宴会では先ず築地さん乾杯の音頭に続き鈴木先生より挨拶、その後席の順に近況報告。40年も経過すると頭髪が薄くなったり白くなったり、また太ったりいろいろに変化していた。

翌日は宿手配のバスで仙台駅へ行く人と、久しぶりに山へ登りたい人に分かれた。小生は山へ行く組で、合計9名で車止めから糸岳、二口峠へ。糸岳の急登では皆さん疲れた様子。みなさん現役の頃にこの糸岳を知らず（当然小生も知らない）なぜ現役の頃登らなかつたか不思議に思った。糸岳山頂で昼食をとり峠へ、ここで朝倉、渋川さんが櫻夫妻と逆コースで山寺へ行くので名残惜しいが別れた。残りのメンバーは小生の車で愛子駅まで送り再会を祈念し別れた。

三宅、藤田はその足で一関経由須川温泉へ。翌日雨の中栗駒山往復。下山後二本松で先輩の佐藤さんと落ち合い安達太良温泉へ。翌日安達太良岳に登り帰路へ。

今回の同期会では10名以上の人が何らかの形で歩けた事は年齢を考慮すると大変喜ばしい事と思ひ、5年後の45周年ではどれだけの人が歩けるか期待したい。



懐かしの二口峠

5期（昭和41年卒）櫻 洋一郎

大学を卒業して40年、とつくに還暦を越えた仲間たちが、記念にと、9月下旬、秋保温泉に集まることとなった。

仙台産の女房と結婚し、仙台勤務(約二年)も経験しながら、学生時代にひたすら歩き続けた二口の山々には縁がなかった。この機会を逃してはならじ、と山寺から峠越えて秋保へ、と仲間を募ったが応答無し。止むを得ず、女房と二人で行動開始。

朝方の曇り空も10:00 山寺駅に着く頃には日が射しだす。かつて小一時間かけて歩いた道を時間を稼ぐため、タクシーを利用して10分。馬形の部落を抜けていわゆる二口林道を右に見て遊仙峡方向の

道に入る。林道はゲートでシャットアウト。自転車、バイクは通り抜け可能？ 数分で峠に向かう大道沢出合いに至る。タクシーの運転手君、峠まで歩くと聞いて、道が荒れてひどいから止めておくと、繰り返す。昔歩いた道だからと制止を振り切って出発。この道は新練、旧練の笹谷峠～山寺で頻繁に使われ、よく歩き込まれ、整備された、目をつぶってでも歩けるほどの馴染みの道……だったはず。

しばらく幅広い道を歩き、左二口峠への朽ちかけた道標を確認、山道に入る。手入れはされていないが、比較的わかりやすい踏み跡を進む。向こうから犬の声、きのこ採りのおじさん。大きなマツタケを数本、自慢げに。恐らく秘密の場所を知っているのだろう。峠への道を尋ねると、何とか行けるだろうとあいまい。

道は大道沢を右左に渡り返しているが、木橋の類はまったく無し。最初のうちは5回、6回と数えていたが後は数知れず。比較的水量が少なかったため何とか靴を濡らさずに渡れたが、雨後はとても歩けたものではない。所々でロープが下がっているところは踏み跡も消えて中吊状態、女房が悲鳴を上げる。

それでもテープのマーキングだけは数多く確認でき、道に迷う心配はない。大きな堰堤を越えたあたりから次第に沢は急に、ブナの原生林は濃くなり熊でも出そうな嫌な雰囲気。沢沿いの道は方々で崩れ落ち、高巻きせざるを得ない。案内書の所要時間2時間10分を1,5倍もかかった頃、ようやく幅広の道に出る。なんと、“県道仙台山寺線終点”の角柱が一本。

ここからは草ぼうぼうではあるが、自動車1台ぐらいいは走れるような線形のヘアピン・カーブが続く、やがて稜線へ。なぜ県道建設計画が頓挫したのか分からず。県道は国交省、林道は農水省の縦割り行政の結末か。13:10二口林道に飛び出す。二口峠の標識、林道とは別に小東岳方向への山道。

今歩いてきた山寺～二口峠の道はガイドブックにも出ているが手入れは全くされておらず、ハイカーは歩いていない様子。里の住民やマニアが利用しているぐらいか？ 古い歴史のある峠道も早晚消える運命にあるのだろうか。

昼飯、小休止の後、秋保に向かって林道を下りだす。どこかで峠から下る旧道があるはず、と調べながら歩くとまったく痕跡無し。止むを得ず、九十九折の砂利道を延々と歩く。懐かしの神室岳、表磐司岩、日陰磐司岩の姿が美しい。谷間の原生林の中に一際目立つ杉の植林地帯。恐らく伝蔵荘のある場所のはず。

峠から30分ほど下ったところで、右手に“二口番所跡入口”の標識を確認。二、三百米脇に鬱蒼とした植林に囲まれて伝蔵荘(翠雲荘)が。昨春、OB間のお話になった山小屋。たまご型ストーブと心地良さそうな板の間、昔と変わらない。

小生も当時ずいぶん二口を歩いた割にはこの小屋の外観の記憶は薄い。8期の仲間が撮った写真の小屋(OB会報36号の写真)は、我々の時には既にあった筈。今の小屋はその後建てられたのか(注)実は、昔のままである)、写真を見比べると窓の形が異なる。小屋の左手50mほどのところに古い墓が数基。沢に降りる道はあるが、下流に下る道は見当たらず。

再び林道に戻って歩き出す。時折、バイク、自転車が通り過ぎる。二口溪谷に沿って平坦な道を下る。白糸の滝付近で再びゲート。宮城県側からの自動車はここまで。

携帯がつながったのでタクシーを呼び、更に下る。二口温泉を間近にしたあたりで16:00、タクシー到着。ようやく秋保温泉に浸かることが出来た。



懐かしの神室岳



日陰磐司

TUWV 卒業30周年OB山行 第8弾 (吾妻小舎、一切経山)

9期 (昭和45年卒) 桃谷尚安

上のタイトルは、相原さんのHP記載されている山行記録から盗作したものである。何のことはない、要するに昭和44年と昭和45年にワングル (あくまで) を卒業したOB/OGが、年1回山に行って、心が満たされて楽しんだ報告です。

参加者：44年卒：前田夫妻、根岸夫妻、濱さん、三原さん、水上さん、中里さん親子

45年卒：伊藤夫妻、富川夫妻、桃谷夫妻、片野さん 総勢：16名

9月2日：福島駅 (車組集合) — 吾妻小舎、浄土平散策、小舎で飲み会兼歌声喫茶会

9月3日：吾妻小舎 — 一切経山 — 鎌沼 — 浄土平 — 途中温泉 (解散)

りんどう、抜けるような青空、翡翠色の五色沼、たおやかな吾妻連峰、素晴らしい仲間。

山行後、山で撮った写真は即座に相原さんのHPに掲載され、それが引き金となってメールのやり取りが多発しました。参加できなかった相原さん夫妻、小笠原さん、藤中さんも来年は万難を排して参加したい由。是非参加をお願いします。

人生の多感な時期にこれだけの素晴らしい仲間と出会い、それから30数年経過しても、会えば心豊かになる。そんな山行でした。山行の雰囲気は下記のHPにアクセスして見て下さい。すばらしいHPです。相原さん、ありがとう。

<http://www5.wind.ne.jp/ata/00azuma/00azuma.html>



一切経頂上で五色沼をバックに

OB会 仙台支部懇親会 (05年、06年)

22期 (昭和58年卒) 利根川敏

仙台OB会では、毎年現役4年生卒業の3月に合わせ、仙台支部懇親会が開催されています。2004年の懇親会は、OB会ホームページに紹介されていますが、05年、06年と懇親会の写真を撮りながら、私の怠慢で長い間PCに暖めていました。(幹事さん、出席者の方々、ゴメンナサイ) 今年のOB会報発行に合わせ、過去2回分の懇親会写真を紹介させていただきます。

場所は東洋軒本店 (国分町) です。最近のクラブの様子や夏合宿の思い出話に盛り上がり、現役時代にタイムスリップしているうちに、あっという間に時間が過ぎてしまいました。



2005年3月



2006年3月

卒業35周年記念 世界遺産の旅 屋久島ツアー

第10期（昭和46年卒）菅原 英行

35周年記念イベントは世界自然遺産の旅にしようとのことで、2年前に屋久島と決まった。いつものように、若佐がプロデュースを担当し、8月5日（土）～9日（水）の4泊5日で実施した。メンバは、杉森夫妻、高野夫妻、高木、藤田、若佐、菅原の8名で、台風もなく快適なツアーとなった。

8月5日の昼前に鹿児島島に集合、市内の中心街である天文館通りの高級レストラン(?)で昼食後、フェリーで屋久島へ。

8月6日、藤田、若佐、菅原、杉森の山組4名は、淀川登山口から洋上アルプスの盟主である宮之浦岳を目指して出発。日本庭園を彷彿させる景勝地の小花之江河（湿原）に着くと、屋久鹿の親子がノンビリと草を食べていた。樹林帯から抜けだし、視界が開け、気分爽快、ペースも快調で11時に宮之浦岳のピークへ到達。あいにく、ガスが出始め、360度のパノラマは楽しめず。新高塚小屋へ向かう途中でスクールに遭遇、「1ヶ月に35日雨がふる」の例えがあるくらいだからとなくさめる。

8月7日、標高1,300m地点にある樹齢7,200年といわれる縄文杉へ向かった。朝モヤの中に現れた縄文杉は、観る者を圧倒する存在であった。その後、トロッコ道をたどりながら、海組との合流地点である辻峠へ向かう。

8月6日、高野夫妻、杉森夫人の海組3名（高木は、8月7日に合流）は、ゆっくりと朝食をとり、島内観光へ繰り出した。紀元杉など、屋久杉の巨木を見学、千尋の滝、大川の滝めぐり、屋久島グルメを堪能、栗生の浜辺で夕陽の中に身をおき、夏の1日を満喫し、若佐が予約してくれた高級一戸建てログハウスを今宵の宿とする。8月7日は、高木を出迎え、山組との合流イベント用品（主としてアルコール類）を仕入れ、山組との合流地点である辻峠へ向かう。

8月7日、予定どおり、12時に山組と海組が辻峠で合流し、コケに覆われた森をトレッキング。海組が持ち込んだ程よく冷えたビールで祝杯。この日の夕方、高野夫妻が先発で屋久島を離れる。借り切った一軒家では、若佐総料理長&藤田料理長が腕をふるってくれた即席の屋久島料理と酒を心ゆくまで味わいながら、40周年記念イベント談義や参加できなかったメンバの思い出話に花が咲いた。

8月8日、屋久島一周に出かけ、南の島の情緒をたっぷり味わった。昼食後、高野夫妻が第2陣で屋久島を離れる。残った4人で最後の晚餐を囲み、それぞれ、個室を確保したため、安眠を妨害する者もおらず、熟睡。

8月9日、台風の影響でフェリーの出航場所が変更となったものの、世界自然遺産の旅4泊5日の屋久島ツアーを終えて、帰途についた。

5年後の40周年記念イベントは、世界自然遺産の旅「空中都市マチュピチュ」にほぼ決まり。



宮之浦岳頂上で



白谷雲水峡で乾杯！

21、22期 知床パーティー記録

22期(昭和58年) 石川 勤

5月より奥多摩にてプレを行い8月に本番を実施。各山行の日程、参加者は以下のとおり。

第1回プレ：5月14日 水根沢 参加者：石川、千田、富士原、石井

第2回プレ：6月3~4日 大雲取谷 参加者：石川、千田、富士原

第3回プレ：7月2日 鷹巣谷 参加者：石川、手塚、石井

本番：8月3日~7日 知床サシルイ川 参加者：石川、千田、手塚

8月3日(移動のみ)

釧路空港よりバスにて羅臼に向かう。羅臼到着後サシルイ川出合いまで移動予定であったが、雨のため安いホテルに泊まる。

8月4日(羅臼~C400沢中)

刺類橋の下で準備をして7:00小雨の中遡行開始。出合いには堰堤がある。前夜からの雨のせいか水量が多い。沢はぬるぬるしてフリクションが効かない。思うように進まない。熊が出そうな雰囲気のため笛を吹きまくる。河原には大きな蔭がびっしり生えていて足元が見えず歩きにくい。沢には何も無いが水量が多いため渡渉が容易ではない。15:00頃右からの大きな滝を通過。C400付近の蔭の河原にて幕営。直後より雨が強くなる。酒飲んで爆竹を鳴らして寝る。

8月5日

朝より快晴。7時より遡行開始。大きな滝が続々と現れる。いくつか登り他は巻く。巻き道として獣道が随所にあるが、熊の糞もあり笛を吹きまくる。



写真上：左の滝

写真右：右の滝



10:00頃C600の大きな二股に到着。右が本流、左の滑滝は羅臼からの登山道に突き上げる沢となる。戻って右より高巻き。

右の沢をちょっと進み2つ目の滝で高巻きに疲れ、エスケープすることに意見が一致。11:30草付きからヤブに突入。C600の二股に落ちる稜線を超えて左俣経由で登山道を目指す。ヤブは灌木から笹を経てついにはハイマツになった。ハイマツと笹の間に獣道を見つけ進む。熊の糞と獣の匂いの為、笛を吹いてヤブを進む。3時間のヤブこぎで左俣に到着。次第に雪渓となり16:00ごろ羅臼からの登山道に到達。この道はほぼ雪渓に埋もれ不明確。18:30頃羅臼平に到着。ビールと差し入れのバーボンなどを飲み寝る。



8月6日

朝より空身で羅臼岳をピストン。ピークより羅臼平方面を見ていると続々と登山者が登ってくる。岩尾別への下山路は羅臼側とは比較にならない良い道である。世界遺産になった為か外人も多い。岩尾別に昼過ぎに到着。露点風呂に入り、ビールを飲み、ラーメンを作って食う。バスにてウトロ經由斜里に着く。JRで網走に移動。民宿泊。

8月7日

飛行機まで時間があるので朝方網走刑務所を見学。女満別空港より帰る。来年は上越の沢の予定です。

インドの農家に泊めてもらって

4期（昭和40年卒）小原佑一

3年間、好き勝手に過ごした南インドの最後に農村を訪れてきました。インド第5の都市、チェンナイから車で2時間ちょっと、ヤシの木やこんもりとした常緑樹の木陰の部落に着きました。車を空き地に止めて下りると鮮やかなブルーのカワセミが迎えてくれました。

ヤシの葉で葺いた屋根の小屋の集落です。面倒を見てくれる人は集落の中心に近い、シバ神を祀った広場に面した小屋に住んでいました。縦穴のない竪穴式住居という表現がぴったりの、炭焼き小屋みたいな小屋です。扉のない、かがまないと屋根に頭をぶっつけてしまう入口から中に入ると、3m四方の土の壁の部屋とそれをL路型に囲む貯蔵庫、台所、玄関ロビー（?）、それでも天井がないので立っても十分な高さがありました。屋内の台所は小さなかまどが一つあるだけ、主に外のかまどで調理していました。

着いてすぐ、喉が渴いただろうと、ヤシの実を出してくれました。夕食は集落初めての外人と言うことでバナナの葉っぱに盛った鶏肉のカレーのごちそうでした。夕食後は広場に座って涼んで過ごす、のんびりと時間が過ぎていきました。一部屋しかないので外に寝ることにしました。マラリヤ、デング熱、チッキングニヤ等蚊によって媒介される病気を気にして小さなテントを張って寝たのですが、テントは暑くて開けっ放しで寝てしまいました。テントの周りには物珍しいのか部落の人たちがごろごろ見物がてら寄ってきて寝ていました。

朝食は夕方搾った牛乳を一晩発酵させて作ったヨーグルトの飲み物、そし新鮮な牛肉（農村では休日の朝に屠殺し解体した新鮮な牛肉が売られている）のカレー、客向けのごちそうでした。

雨の少ない地域なので炊事に使う水は時間給水の共同水道、弥生式の土器のような水瓶にためて貯蔵します。シャワーや水浴は畑や田んぼの灌漑用の井戸からポンプでくみ上げます。トイレは、女性は集落の東側、男は西側の畑の方の屋外だそうです。

久しぶりのアウトドア生活でした。



訪れた部落（上）と家（下）

飯豊山・石転び沢（2006年7月）

4期（昭和40年卒）及川捷悦

この七月、一年先輩の佐藤敦さんと飯豊の石転び沢を登ってきました。前回登ったのは、大学3年か4年の五月でしたから、40数年ぶりの再訪です。

今回は、長者が原から歩いて温身平まで行きその小屋で泊まり、翌日は梅花皮小屋泊。翌日、大日岳を往復、小屋泊し帰仙という日程でした。

今回は、飯豊山荘迄車で入り、翌日、朝四時半に出発し日帰り往復という、あまり年寄り向き

でない計画を立てました。天気次第では途中で帰るつもりが、梅雨の間ながら運よく荒天にならず、梅花皮小屋へは11時過ぎに到着。昼食後往路をそのまま降り、四時頃、国民宿舎の梅花皮荘に帰着し、モーツアルト生誕250年記念という赤ワインで乾杯しました。ワインは旨かったのですが、その後、足の筋肉痛が三日ほど続いたのはやはり歳のせいでしょう。

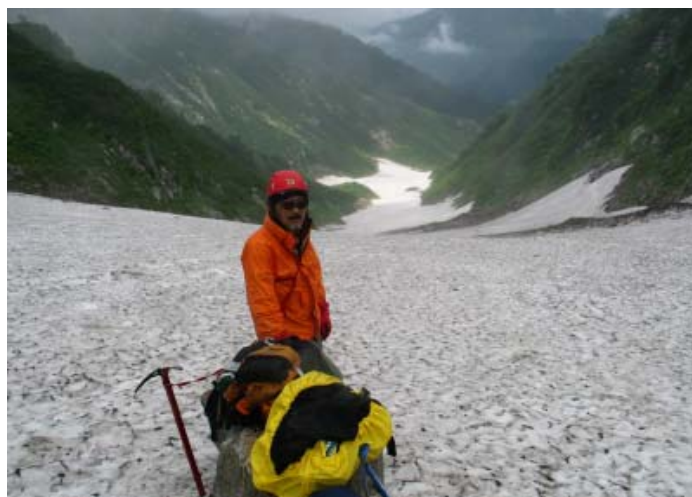
登りの草つき周辺の傾斜45度（ガイド本にはこうあるが実際はどうか）の斜面は簡易アイゼンが効かず、キックステップに頼らざるを得なかったため、普段あまり使わない筋肉を酷使したのが原因でしょうか。

飯豊山荘から温身平の間は、いまは遊歩道も出来ていて、ブナやヤチダモの巨木がそこにあり、昔ながらの良いたたずまいでした。

きつい山行きは、ヒマラヤを除いたら今年はいくらでも、必ず温泉が前後に待っているところしか行っていません。今回も飯豊温泉と姥湯温泉にしっかりつかってきました。



出合にて



出合方向 佐藤敦さん

山梨県大月市の雁ガ腹摺山と黒岳

6期（昭和42年卒）加藤邦明

2006年10月30日の5時43分に鎌倉市の自宅を愛車で出発した。途中、真木溪谷の紅葉は盛りであった。駐車場のある大峠（標高1,560m）には9時27分に到着した（曇り/寒冷）。峠の看板に「小金沢おじの森」と書いてある。

雁ガ腹摺山への地形図に表示されている直登に近いジグザグ道は通行止めになっていて、登山道は巻くように南側に回り込んでいた（9時43分）。御硯水ー水場ーカメラを抱えた4人組の下山に擦れ違ふー尾根筋ー平地（10時22分：下山のご夫婦と擦れ違ひ）ー緩傾斜地（霧/下山の高齢登山者3名に会った）ー右へ姥子山への分かれー雁ガ腹摺山山頂（10時41分）。

山頂（標高1,875m）には、晴れていれば富士山が見える方向に、この山が如何に著名であるかの説明図が置いて有り、「五百円札に描かれた富士山の撮影地。撮影者：名取久信。昭和17年11月3日」

となっていた。

何時まで待っても霧が晴れて富士山が見える状況になりそうもないので、10時51分に下山とした。平地の下で、4人組の上りの女性登山者と擦れ違った。大峠の駐車場には11時30分に戻った(曇り)。

大峠の駐車場を挟んで西側には、黒岳なる頂が地形図に示されている。2005年9月19日に登った。鎌倉の自宅を6時08分に出発し、大峠には9時25分に到着した(曇り)。

9時39分に出発し、始めのピーク(9時57分)－1792ピーク(10時16分：道標あり「右黒岳に至る、左赤岩神社にいたる10分」)－急な登り－尾根(11時05分)－黒岳(11時08分：一等三角点1987.5m)。山頂は黒松樹林で周辺の景色は見えない。景色が見えないので、下山開始(11時20分)－1792ピーク(11時52分：曇り)－12時15分に大峠の駐車場に戻った。



雁ガ腹摺山の山頂



黒岳の山頂

スイスアルプスの旅

7期(昭和43年卒) 真尾征雄

本場アルプスに行くことは長年の夢であった。今年の春、旅行会社のチラシに「スイスアルプス三大名峰8日間の旅」の文字が目にとまった。仙台空港発着で、モンブラン、マッターホルン、ユングフラウが観光できる。連泊が二回あるのも魅力的だし、現地ガイド付きのハイキングも二回入っていた。家内は体力的に無理なので、相棒をワングルの仲間に募ったところ、同期の手戸さんが「是非行きたい」とのこと。写真のプロで几帳面な手戸さんが相棒として同行してくれるのは、心強いばかりである。天候が比較的安定しており、高山植物が咲き出す6月13日出発の便を予約した。

名古屋セントレア空港で乗り換えて、ドイツのフランクフルトへ。そこからは小型機でジュネーブへ。約14時間の長旅であった。紙面の都合でハイライトのみを紹介する。

スイス初日は大型バスでフランスのシャモニーへ入る。ここからロープウェイを乗り継いで一気に3,842mのエギュードゥ・ミディ展望台へ。真っ白いモンブランの雄姿やグランドジョラス針峰群が眼前にひろがり、感激のひとつき。快晴で陽射しが強く、フィルターを付けないとモンブランは写らないほどだ。この日はツェルマットに泊まる。

ツェルマットは静かで、うつくしい街だ。排気ガスを出す自動車は全て一つ手前の駅までしか入れない。街の中の交通手段は、電気自動車か馬車か自転車か徒歩である。家の窓際には、あざやかな色の花が飾られている。けばけばしい看板や洗濯物は、どこにも見当たらなかった。

早朝5時ホテルを出て、マッターホルンが朝日に輝く瞬間を写しに、ビューポイントの街はずれの橋の上へ行く。多くの日本人が集まっていた。5時35分日の出とともに山頂が輝き、見る間にそれがひろがり、30分ほどで山の上部が赤銅色に染まる。感動の一瞬を息を殺してシャッターを押し続けた。

ゴルナーグラート展望台へはアプト式登山電車で、車窓の景色を楽しみながら行く。展望台からは360度パノラマの絶景で、若かりし頃に写真で見たアルプスの山々が眼前に聳え立っている。

帰りは途中で電車を降り、色鮮やかな高山植物が咲き乱れる中をハイキングする。途中、幸運にもリッフェル湖に映る「逆さまッターホルン」を見ることができた。午後は自由なので、気の合っ

た仲間4人でスネガ展望台へ上り、そこからハイキング。テラスでマッターホルンを眺めながらビールをのんびり楽しむ。さわやかな風が吹いてきて心地よい。時間が止まったような贅沢なひととき。帰りは手戸さんの写真教室。お花畑で時を忘れて、シャッターを押していた。いままでたくさんの山行をしてきたが、こんなに楽しい山行は初めてであった。元気なうちにもう一度訪ねたい。



リッフェル湖に映る「逆さまッターホルン」



お花畑からマッターホルン遠望

オーストラリア・ブルーマウンテンでロッククライミング

8期（昭和44年卒）佐藤拓哉・良子（タック&オギヤー）

レンタカーを借りて、シドニーから西へ、一路ブルーマウンテンに向かう。しかし、走れども、走れども山らしいものが見えてこない。にもかかわらず、目的地のKatoombaに着いてしまった。とりあえずホテルにチェックインし、現地のガイドと落ち合って岩場に向かう。その途中で断崖絶壁を見て、初めて自分達が山の上に居ることが分かった。

ブルーマウンテンは広い台地の上に町があり、台地の周辺に100～200mの垂壁が延々と続いている。山の上から谷底まで、素晴らしいユーカリの原生林が広がっている。日本の感覚では、町は谷間にあり、山は頭上にあるが、ここはまったく逆である。ユーカリの出す油分のため景色が青みがかって見えることから、ブルーマウンテンという名前がついている。

今年の3月、貯まったマイレージを使ってオーストラリアにクライミングに出かけた。初日はシドニー観光、有名なオペラハウスの付近を散策した。

2日目からは、さっそくクライミングである。写真からも分かるように、どこもほぼ垂直の壁であり、その迫りに圧倒される。ユーカリの林をぬって岩壁の基部まで下る。日本と違って、ここではアプローチはすべて下りである。手始めに、比較的簡単なルートを3本登る。ショートルートとは言いながら、いずれも50mいっぱいあり、おまけに傾斜がきつく、登りがいがある。

3日目は、別のエリアで、有名な Three sisters という岩を背に見ながら、待望のマルチピッチである。岩壁の基部までクライムダウンし、岩壁の中間をしばらくトラバースすると、上部が頭上に覆いかぶさってくるようなフェースが広がる。フェースの左側に伸びる明瞭なクラックを登り、途中でフェースをトラバースし、最後はほぼ垂直の凹角を登る全5ピッチのルートである。写真は、2ピッチ目のクラックを登り終え、狭いテラスに並んで座しているところを、トラバースし終えたガイドが撮ってくれたものである。

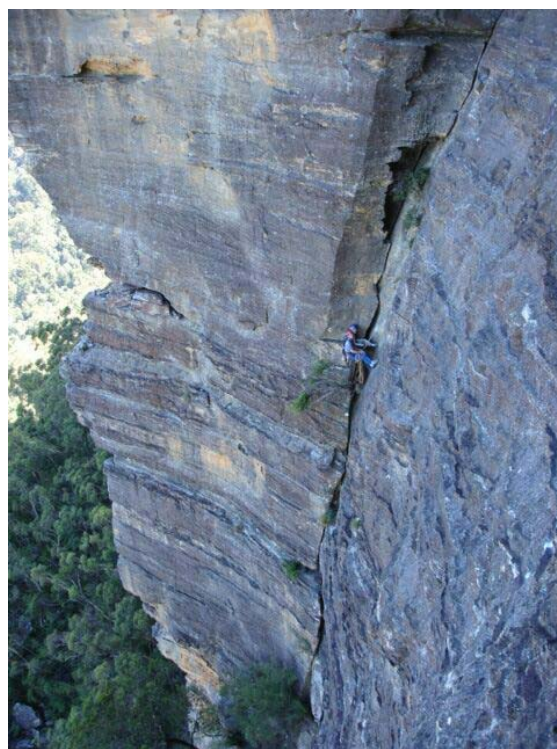
4日目は、魅力的なショートルートが揃っているというエリアに連れて行ってもらい、クラッククライミングに挑戦した。

次の二日間は、70以上のワイナリーがあるハンターバレーで過ごした。葡萄畑に囲まれたプチホテルに泊まり、ワイナリーのレストランでおいしいディナー、空には南十字星と天の川……素晴らしい夜でした。

最後の一日は、シドニー郊外の海辺の岩場へ。この砂はうっすらと赤味があった白い砂で、とてもきれいである。土曜日ということもあって、多くの若者が岩に取り付いていた。どこがなんというルートかも分からないまま、登れそうなルートを選んで、最後のオーストラリアを楽しんだ。



このような垂直の壁が果てしなく続く



クラックからフェースのトラバース

ベトナム事情

19期（昭和56年卒）小山茂典

最近仕事の関係でベトナムによく行きます。大変魅力的、かつ今まさに経済発展中の活気のある国です。あくまで出張者の眼でのスケッチですが、最近のベトナム事情を下記に。（なおベトナムも南北に長い国で、地域特色もそれぞれです。当方のベトナム経験は、当方の会社の工場の一つがあるホーチミン市（旧サイゴン市）周辺の話です）

経済：GDP成長率は毎年8%レベルと、ASEAN諸国の中でもトップクラス。でも、一人当たりGDPはまだ\$650程度。工場のワーカーの給与も、残業をこなして月\$70くらい。消費市場としてはまだまだだが、政治・治安も安定しており、生産市場として外国投資が非常に活発。ベトナム戦争の影響で、隣のタ

イに比べれば周回遅れのスタートだが、猛烈に追い上げているランナーとも言える。

人；向上心が高く、勤勉で優秀な人多し。笑顔が素敵な、感じの良い人も多い。特に南は開放的で明るい感じ。何せ、アメリカ相手の戦争で唯一勝者となった国であり、パワーとプライドも感じます。仕事は英語でほぼ不自由なくでき、頭のいい人が多いので、サクサク進み気持ちがいい。

食；おいしいよ。ベトナム料理もさることながら、中華やフレンチまで含めてレベル高し。コストパフォーマンスから言えば、アジア・ナンバー・ワンの食の国と私的には言いたい。ほとんど日本人が住んでいないのに、日本料理もなぜかおいしい。民度が高いと言うか、食センスが豊かと言う気がする。お手軽なもので言えば、フォーやブンという麺。米粉の細い麺に、牛や鶏のあっさりスープと香り高い生野菜、ヌックチャム(ニョクマムと唐辛子等の調味料)で好きにふりかけ、ハフハフ。朝食が一般的だが、軽食や夜食に最高。バイミーというサンドイッチも、お手軽ベトナム的。フランスパン(あまり硬くなく中は柔らかい)にハムやチーズとニョクマム風味の野菜ハーブをはさんだもの。何となくつかしい味。いわゆる高級ベトナムレストランもまず外れなし。有名な生春巻きもバリエーション多く、鮮烈。一般的に、新鮮な素材にあっさりとした味付け。中華広東とフレンチのエッセンスが加わり、ベースをニョクマムとハーブの香りが控えめに支えるという、とにかく想像力を刺激する料理が多くて楽しい。衛生を気にする向きもあるが、ワングルの胃袋であれば問題ないでしょう。

アオザイ；最も女性を美しく見せると定評の民族衣装アオザイ。ホーチミンの風物詩の一つは、白いアオザイの女子高生の群れが颯爽と自転車走らせる通学シーン。スクールがザッと降ると、うっすら透けるカラフルな下着・・・ということになっていたのだが、最近はアオザイ通学は週1回か2回。普段はジーンズという風潮だそうです。アオザイは、実は着る人を選ぶもので、最近のアメリカナイズされた食生活はベトナム女性にも影響があり、アオザイを着こなすスタイル維持が困難な人も増えているとか。さすがに普段着ではなく、ハレの日に着る晴れ着、もしくはサービス業の人の制服という感じ。なお、おみやげにアオザイを買う人もいますが、日本人で似合う人は見たことがありません。

今年も山岳耐久レース

22期(昭和58年卒) 西川雅明

今年も10月8日に開かれた奥多摩の山岳耐久レース(71km 制限時間24時間)を走りました。結果は、11時間09分52秒で2004人のうち63位でした。昨年が11時間23分23秒で2018人中57位でしたので、ほぼ昨年並でした。

レースの翌々日から欧米出張に出かけなければならず、その準備でレース前日夜まで仕事をしてきたことや、股関節や足裏に痛みが残っておりサポートテープを巻いて出場するなど、コンディションが必ずしもよくなかったことを考えると、予想より結果がよくてホッとしたところでした。

しかし、天候には恵まれました。月が綺麗でした。夕焼けを背にした富士山も、遠くの夜景も、吹き上げて来る風も格別でした。今回のレースはそうした美しい風景に気を取られていたので、いつもより短く感じられました。

西原峠より富士山 走りながらシャッター



いかがお過ごしですか？

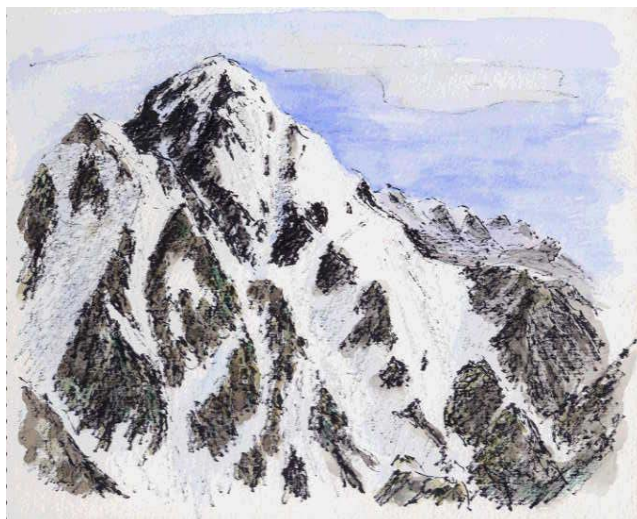
5期(昭和41年卒)の吉田公平(東洋大学文学部中国哲学文学科)です

最近の私学は我々が学んだ頃の大学とは大違いで、何せ忙しい。大学も成果主義であれもこれもと盛り沢山。これまでの蓄積でこなしていますが、今が充電期の若い世代は痩せたままで年をとる恐れ有り。国策の間違いが近い将来に負の遺産を贈るでしょう。

小生はあと少し。仕上げの仕事を71歳、84歳の人と共同で。彼等のもと商社マン。縁あって幕末維新期の哲学者の自筆写本を活字に起こす仕事をしています。彼等は実力派。とても頼りになります。このごろ、あちこちに小文を書き散らしています。共生社会、持続可能社会、情報化社会など、当世向きの研究班に参加。よく人権問題で講演依頼が入ります。しばらくしたら、岩沼市に帰りますが、今は、福岡・東京・岩沼の三重生活。皆さんにお会いするのを楽しみにしています。

8期(昭和44年卒)の佐藤拓哉(タック&オギヤー)です

今年メディア露出の多い年でした。年末、北八ヶ岳の湯川の氷柱でアイスクライミングをしていたところ、TBSの番組を作っている人の取材を受けました。その関係で、正月明けに、茨城県の袋田の滝を登るところを、家を出るところから取材され、その様子は2月初めのドキュメント・ナウで放送されました。タイトルは「命をかける男と女 氷壁に挑む」という、なんとも凄まじいものでした。還暦の年のいい記念になりました。



知り合いのクライマー(ビデオ編集のプロ)の「日本の美しいクラシックルートを登る」というビデオ製作企画に賛同し、今年次は次の3本のビデオ(DVD)を撮りました。いずれもネット販売しています。

ダイジェスト版は <http://www.originalcv.com/climbing/index.html> で見ることができます。(Real Playerがあれば見ることができます。もしなければ、このホームページからダウンロードできます。写真は「レポート便り」にあります)

- ・谷川岳一の倉沢・一の沢右壁左方ルンゼ アイスクライミング(3月、ガイド+タック)
- ・谷川岳一の倉沢・衝立岩中央稜&烏帽子奥壁中央カンテ(6月、タック&オギヤー)
- ・錫杖岳前衛壁・左方カンテ&1ルンゼ(10月、タック&オギヤー)

北穂高岳滝谷ドームも登ったのですが、ちょうどカメラマンがギリシャにクライミングに行っている間でした。来年も、何本か撮りたいと思っています。狙いは、穂高の岩場!!

日本高圧力技術協会の会誌「圧力技術」に、「スケッチの山旅」というタイトルで、スケッチ入りの随筆を連載(6回)しています。一般には知られていない雑誌ですが、どこかで目にしたら、目を通してみてください。

20期(昭和56年卒)の佐々木晃(ささき農園・開業6年目)です

1年を通じて、大勢のTUWV仲間が農作業を手伝ってくれました。トマト用パイプハウス建設(3月・写真左)、稲藁集め(10月)、落ち葉集め(12月)の3回は、人手が要るので当方からメンバー募集。それぞれ8人、13人(家族含む)、5人が参加、PL役の岩屋(20期)の思惑とは裏腹に、ことごとく好天に恵まれ、日中はみっちり農作業です。日没後は、春秋はバーベキュー、冬は鍋。飲むほどに酔うほどに山の歌の大合唱が始まり(これは嘘)、酔った者からシュラフを引っ張り出して雑魚寝(これは本当)と、まるで現役時代にタイムスリップしたみたい。

この3回が合宿だとしたら、それ以外はフリー山行。単独で、あるいは2・3人連れ立って、はた

また夫婦で、親子でと、しばしば来訪がありました。雑草取り、芋掘り、支柱建て、マルチ藁敷きなどのコースで、日帰りから2泊3日まで、数えたらなんと19回。これだけ協力してもらったのだから、ささき農園の生産性も大いに向上して、作物の出来も良く（写真右）、今年は楽だったねえ、儲かったねえ、となって然るべきなのに、そうは問屋が卸さないのが有機農業の難しいところです。

来年も何回か合宿を行いますので、お近くの方はどうぞご参加ください。



22期(昭和58年卒)の利根川敏です

大学卒業後18年目に転勤で仙台に戻り5回目の年末を迎えています。10月に北仙台から宮城野区へ引越しをしました。北米生活を含め、今回が人生13回目の引越しです。

OB/OGの電子メールアドレス管理人も来年は9年目に入りました。年間で30件前後のアドレス更新(新規or変更)がありますが、OB会報の一斉配信では20件前後が不達メールで私の元に戻ってしまいます。このため、有効なアドレスは300名まであと一息といったところです。

10年の節目に300名の大台を越したいと思いますが、こればかりは皆様からの新鮮な情報を待つしか方法が無い様です。佐藤さんから郵送でこの会報を受け取っている方で電子メールをお持ちの方は、ぜひ私(利根川)まで、メールアドレスをご連絡下さい。 GWT00287@biglobe.ne.jp

最近では登山からほとんど縁が遠くなり、1月の新年会(新橋亭)、3月の新人OBの歓迎会(仙台)、11月のOB会報原稿の投稿依頼(+催促)、12月のOB会報完成の連絡と、1年間の流れがほぼ定着してきました。アドレス管理人の立場上、会報発行前に本格的な山行報告を読ませて頂くチャンスもあり、そのたびに冬山を含め現役時代に90日も登山をやっていた自分はどこに行ってしまったのか・・・と思うこともあります。

登山からは縁遠くなりましたが、3年前に始めた自転車通勤が私の運動不足解消に大変役立っています。片道10kmを35分かけて、自宅から職場まで自転車で通勤しています。それでも現役時代の体重(63kg)から日帰り山行のザック程度(約10kg)の贅肉が腰の周りにまとわり付いている状況です。

仙台赴任後は、NECトーキン(旧東北金属工業)で、東北大学連携や宮城県、仙台市のイベントなど、地元関連の研究開発業務を担当しつつ、毎週のように東京方面へ出張し、120日は東京、240日が宮城県といった生活が続いています。TUWVで鍛えた体力を何とか自転車通勤で維持しながら、充実した日々を送っています。

仙台に呼び寄せた家族も、今年から長女は東京の大学生に、長男も2年後には東京に戻る様で、5年後に末っ子がこちらの高校を卒業すると、家内を含め私以外はすべて東京へ戻る見込みです。末っ子が中学に入り、最近では時間的な余裕も持てる様になり、25年も前の学生時代に家内と訪問した鳴子や白石方面へ日帰りで出かけることもあります。

今度とも電子メールアドレスの管理を通じて、皆様のお役に立てればと思っています。最新アドレスが必要な方、電子メールの追加、修正が必要な方は、下記連絡先までご連絡下さい。今後ともよろしくお願いたします。

22期（昭和58年卒）の坂口謙史です（nobinobitei_kenchan92@jcom.home.ne.jp）

四十歳代も半ばを越えた今年は、第二の人生も展望し、「現在の仕事」、「家庭」以外にも軸が持てるよう、大学卒業以降たどってきた人生に軌道修正を施すべく、色々と模索した一年でした。そんな中、現在では「環境保護活動」が「軸」候補になりつつあります。

今年5月、ネット検索で知ったFoE Japan (<http://www.foejapan.org/>) というNGOの個人サポーターとなり、8月に中国内蒙古自治区内のホルチン砂漠というところの砂漠緑化ツアーに参加しました。

ここでいう「砂漠」とは30年くらい前までは草木の茂る土地でありながら、人口集中に伴う過放牧等、土地の過剰利用により、草木の生えない砂ばかりの「劣化した土地」になってしまった場所のことです。砂漠緑化とはこうした人間の行為が引起した「砂漠化」という悪循環に対し、植樹という形で手を貸すだけで、自然の治癒力が目覚め、地力が回復し緑に転ずる、といった好循環に転換させる活動で、しっかりした手応えが感じられ、従事してみて大変意義深いものでした。そして更に、これを通じ、七十歳代の方から息子と同一年の大学生まで幅広い人たちと知り合いになれたことも大きな収穫でした。現在は、炭焼きの活動にも参加しており、来年は里山保全活動にも参加する予定です。

振り返って鑑みるに、こういう活動が自分になじむのは、人生の多感な時期に自然豊かな東北の地で過ごし、WV活動でそうした自然に直にふれあってきたからに違いありません。

ところで、炭の効能は色々言われていますが、実際問題、できた炭を何に使うのが一番世のため人のためになるのか思いあぐねております(現状、月イチで一回あたり数キロ生産できる程度ですが)。TUWVのOBの皆さん、良い活用方法をご存知でしたら是非ご教示願います。

22期（昭和58年卒）の西川雅明です

今年は「東京都県界走破」を企てました。1年間で羽田から出発して、東京都の境界線を忠実一周するという計画です。それが終了していれば、そのことを記事として出そうと考えていたのですが、種々の事情があり、現在三頭山で止まっています。2年がかりになります。もし来年走破できたら、来年記事として出します。

境界線の走破は、山よりも町の中が難しいです。町田付近は境界線が私有地内にある場所が多く、苦労しました。

<二口小屋の火>



ストーブはまだ誰も使っていない新品でした。

煙突から風が吹き込んでくるので、上の蓋を取り、ストーブというより、まるで焚き火でした。

目が痛かったが、美しい炎でした。

(2005年2月、佐藤拓哉)

ワングルの初代部長を務められた鈴木禄弥先生が、12月22日にご逝去されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

◎死亡：12月22日（金）

◎通夜：12月25日（月）18：00～

◎葬儀：12月26日（火）13：00～

◎喪主：鈴木ハツヨ様

◎場所：斎苑

仙台市青葉区木町通2丁目2-12

（TEL：022-271-2230）

5期（昭和41年卒）青野登喜子さんが、12月23日にご逝去されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

◎死亡：12月23日（土）

◎通夜：

◎葬儀：12月27日（水）13：00～

◎喪主：青野勝利様

◎場所：斎苑

仙台市青葉区木町通2丁目2-12

（TEL：022-271-2230）

鈴木禄弥先生と青野登喜子さんの元気なお姿は、3ページ目の「ワングル卒業40周年同期会」の写真に、隣に並んで写っています。改めてお二人のご冥福をお祈り申し上げます。

新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2007年1月26日(金) 18:30 (会費は10,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい) (TEL 03-3580-7811)

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp

<2006年新年会出席者>

今年の新年会も去年と同じく、48名と大勢の方が出席されましたが、出席者を記録した名簿がまた見当たりません。すみません。

<OB会報バックナンバー>

会報も今年で37号になります。5号から作り始めましたが、昔のものは当然手書きで、今はなくなった湿式のコピーです。中にはガリ版刷りのものもあり、逆に懐かしさが込み上げてきます。

古いものをスキャンし、HPに載せようと考えています。昔を懐かしみたい人はお楽しみに！

<eメールの力>

OB会も会員が514名(内、10名死亡)になりました。

そのうち会報をメールで送っているのが半数の266名(53%)、郵送が114名(23%)です。どちらでもお届けできない方が124名(25%)です。

TUWVOB会 2004年会計報告

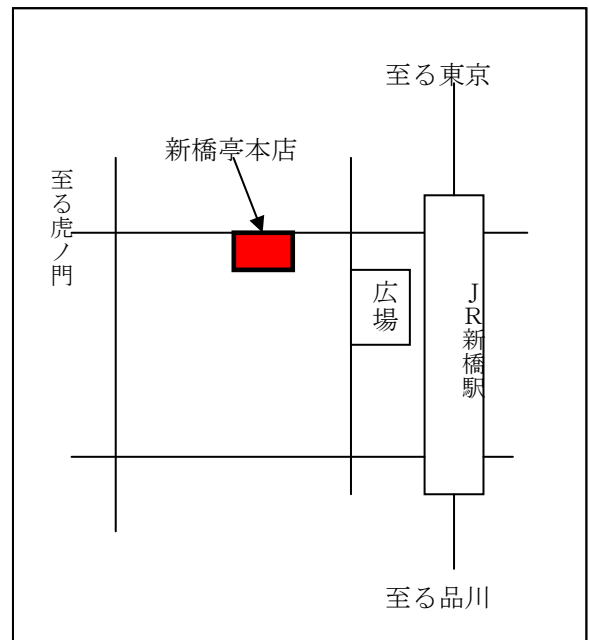
(東京口座)

1. 収入

前回から繰越	377,270
OB会費(18人)	18,000
利息	2
計	395,272

2. 支出

会報印刷	19,561
送料	11,970
封筒、ラベル	318
事務用品、通信	1,151
次回繰越	362,272
計	395,272



★★事務局より★★

◇ OB会員に不幸があった場合、OB会として次のように対応しています。

- ① 本人または配偶者に不幸があった場合はOB会として対応する。
- ② 葬儀に間に合う場合は同期の誰かがOB会名で生花を出す。費用は後日事務局に請求する。
- ③ 葬儀に間に合わなくて後日同期の方が線香をあげに行く場合は、OB会名の香典(本人の場合は1万円、配偶者の場合は5000円)を持っていってもら(事前に事務局に連絡)。費用は後日事務局に請求する。
- ④ それ以外の場合は、あまりおそくならない限り事務局から香典を郵送する。

☆ 年会費は1000円です。1ページ目の口座に。